

日本体操学会会報 Vol. 7/ 2011. 1

ごあいさつ

「10回学会大会を終えて」

日本体操学会会長 古川 善夫

2010年から次の10年間の方向を探る大会が、盛況に終了しました。日本体育大学の荒木・三宅氏に感謝するとともに、会員の皆様の積極的な参加は見事でした。動いて、笑って、学んで、動くなど・・・体と心一つになって皆様と交流することができたのは私一人ではないでしょう。それら交流の中で学んだことは、多様な動きとの出会いが、自分の体操の中に歌や言葉や動きになって、生きるということです。動いて学んだことを言葉で表す対話型の大会がこれからの一方向になるかもしれません。



1. 平成22年度日本体操学会総会報告

平成22年度日本体操学会総会は、12月12日（日）12：30～13：00に日本体育大学世田谷キャンパス3201教室にて故春山国広前会長への黙祷後開催された。平成21年度事業報告・決算報告、並びに平成22年度事業計画案・予算案の議題はすべてが承認された。今総会では、体操に関する研究や会員相互の交流がより深まることを目的とした「日本体操学会公募プロジェクト」が承認され、募集することとなった。（金子 嘉徳）

2. 日本体操学会第10回大会報告

1) 基調パフォーマンスおよび実技講習

通常の学会は基調講演からスタートするが、「動いて学ぶ」体操学会は実技講習会でスタートするべきであると判断した。

近年「サラリーマン体操」で体操の範疇を超えたパロディー・パフォーマンスが話題となっている。そして、その演技をしているコンドルズに白羽の矢をたてた。まずコンドルズ3人による演技を観た後、参加者全員でその作品の演技を近藤良平氏のナレーションにしたがって指導してもらった。最後にはNHK連続テレビ小説「てっぺん」のてっぺんダンスを行った。



参加者の反応もよく、体操学会のスタートとしての役割は十分果たせたユニークな企画だった。

（荒木 達雄）

2) 研究発表

(1) 口頭研究発表

口頭研究発表は、「『体づくり運動』の系統的内容」(古川善夫)、「ロディーと G ボールにおけるバウンドの特性の違いについて」(高橋靖彦他)、「元気の出る体操」(神川輝彦)、「一般体操のすすめ」(荒木達雄)の4題であった。(敬称、所属略)発表内容は体操の学校教育における現在の系統的傾向から、体操の物理的比較研究、現場報告、一般体操の世界的傾向など多岐に渡り、限られた時間の中で中身の濃い発表であった。本学会において研究発表は、自分の実践



的活動等を専門分野または他分野の方と、リアルタイムにディスカッションできる場である。この「リアルタイム・ディスカッション」は、学会趣旨の「動いて学ぶ」の中心的内容と思われるので、今後も多くの会員の方がご自分の実践内容等を発表し、多角度から「リアルタイム・ディスカッション」に参加して頂けたらと思う。(金子 嘉徳)

(2) ポスター研究発表

教育棟 2201 教室を会場に、5 題のポスター研究発表が行われた。各発表者による 3 分間のショートプレゼンテーション後、それぞれのポスター前での質疑応答が開始された。ノートパソコンや実際の用具を持参し、より詳細な説明をされている発表者も見られた。

ポスターの周囲には大きな輪ができ、和やかな雰囲気の中にも、非常に活発なディスカッションが行われた。大学生・大学院生や若手研究者から、積極的に質問がなされている様子が印象的であった。質疑応答を通して新たなアイデアが生まれ、発展的な議論が行われていたように感じられた。(大塚 隆)



(3) 実技実践研究発表

スポーツ棟で4件の研究発表が行われた。内容はバランスをテーマとしたリズム体操の紹介、小学校体育の教材として実践されたコンビネーション縄跳びの提案、跳び箱を使用した側転の指導法の紹介、オリジナル器具のバランスボードを考案した転倒予防体操の提案であった。実技研究発表は本学会の独自性を示す発表様式である。座長の力不足で、提案された運動やプログラムに対して十分なディスカッションをすることができなかった。反省するとともに発表時間の配分を含めた発表方法を工夫することが今後の課題と思われる。(後藤 洋子)



(4)映像研究発表

より実践的な体操の研究をプレゼンするという見地から本学会で初めて採用された発表部門である。どちらの発表とも実践での映像を上手に編集され、具体的な取り組みについて大変わかりやすいものであった。演目数が少なかったのは残念であるが、今後の学会での新たな取り組みとして継続して検討してほしい。(三宅 良輔)



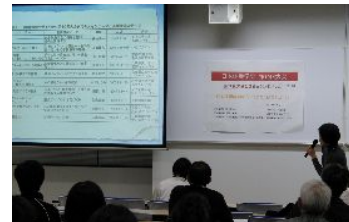
3) 第10回大会記念企画シンポジウム

日本体操学会の「これまで」と「これから」

- ①体操学会を振り返って 後藤 洋子 (三重大学)
- ②体操学会の課題と未来 長谷川 聖修 (筑波大学)
- ③舞踊領域から見た体操(体づくり運動)領域への提案 高橋 和子 (横浜国立大学)

本シンポジウムは、学会本部の企画として行われ、これまでの経緯を後藤洋子副会長、今後の展望を長谷川聖修が担当し、隣接領域からの提案として高橋和子女史にシンポジストをお願いした。

後藤先生からは、第1回から10回大会のメインテーマと基調講演のテーマ等を一覧にして提示してもらい、その変遷を振り返りながら、本学会の対象となっている体操の持つ内容の多様性や独自性を考える機会を得ることができた。加えて、日本体操学会設立のための準備段階から御尽力され、昨年度まで8年間に渡り会長を務めてこられた春山国広先生の御功績についても触れていただき、その足跡を辿った。



長谷川からは、「動いて学ぶ、学んで動く」をモットーとして発足した本学会が、今後取り組むべき課題について提案された。体操は、常に変遷する社会の中で価値付けられてきた領域とも言える。今は「利便性と効率化」が重視される時代であり、これは裏返すと「非身体運動化(動き泥棒)」とも思われる。人が健やかに生きる上で、動きの多様性を生活の中でどのように確保するのが本学会に求められている。こうしたニーズに応えるべき「体操プログラムの創発」の重要性が指摘された。

高橋先生は、午前中の講師であった近藤良平氏の恩師でもあり、彼との関わりや日本を代表する舞踏家大野一雄氏(日本体育大卒)の活動などを通じて、踊ることの本質と体操との関わりについてたくさんの映像を通じて解説された。また、最新の投稿原稿(体育科



教育 2011.1月号巻頭言) から教育現場で体づくり運動が果たすべき役割 (運動嫌いをなくす) についても明確に指し示していただいた。

フロアーからは、体操の「操」の主体についての吟味など、いくつかの質疑がなされ、これ以降の論議は、茶酒話会で深めてもらった。(長谷川 聖修)

4) 茶酒話会

大会初日、18時30分から「茶酒話会」の名称で日本体育大学のカフェテリアで気軽に参加できることをコンセプトにした懇親会が開催された。北海道から九州まで全国の体操の仲間が一堂に会し、ゲストメンバーの近藤良平さんら (コンドルズ) や金原亭世之介さん (落語家) も参加されて、和やかに交流が行われた。今回は学生の参加者の交流の場も設定され、参加者は貴重な情報交流の機会を楽しんだ。初参加の人や新入会員も積極的に情報や意見交換を行っていた。(吉中 康子)

5) キッズ・プロジェクト報告

2006年より発足したキッズ・プロジェクトの活動報告が、新しく建てられたスポーツ棟体育館で行われた。キッズ・プロジェクトは、子どもの運動不足や運動能力・体力の低下、コミュニケーション能力の低下、親子関係への支援など、現代社会が抱える子どもに関わる諸問題を踏まえ、一人でも多くの子どもや親子が運動を通して幸福感が味わえるような運動プログラムや体操の考案を目的としたプロジェクトである。オリジナル創作体操「BoもBeもどう〜も」をはじめ、うたって体操をテーマに提案された数々の体操や運動遊びで、会場は、終始たくさんの笑顔であふれた。



(大島 林子)

6) 大激論会 (体操を踊る!?)

司会・進行 荒木達雄

シンポジスト 知念かおる (エアロビック) 森末慎二 (体操競技) 永利真弓 (ダンス)

美馬 美千代 (新体操)

最近、体操を「踊る」ということが指導場面や演技発表の紹介などで耳にすることがあるが、このことについて、各領域のオーソリ



ティから意見をいただきながら、討論したい旨、荒木先生から提案理由が述べられた。まず、各領域で「踊る」という言葉をどのように理解しているのかについて説明がなされた。エアロビックでは、リズムに乗って動くことは踊ることであり、体操競技でもバレエのクラシックが動きの基本となりつつあること、ダンスも体操と境目がなくなりつつあり、新体操では「踊る」という表現にあまり違和感がないことなどが述べられた。その後、フロアーから、改めて体操において「踊る」ということに否定的な意見から、積極的に「踊る」ということを進めて行っ
てはどうかなど、様々な意見が出され、まさに大激論となり大いに盛り上がった。改めて「体操」と「踊る」という概念の広さを痛感した。（長谷川 聖修）

7) 講演（言葉のパワー）・ミニライブ・落語（親の顔）

言葉のパワー 金原亭世之介（落語家）

まずは、落語「時そば」を一席披露いただき、言葉による情景描写の深さを実感させていただいた。その後、自分の思うイメージや他者からの言葉かけによって、からだはどのように影響されるのかについてわかりやすく解説された。具体的には、胸を張って上向きの姿勢を取ることで、心理的にもポジティブな感じを誘導できることも興味深い指摘であった。最後に「肩の血行を良くすることを許可する」と一同で唱え、笑いの絶えない講演であった。



ミニライブ 里アンナ



学会では異例のミニライブが開催された。奄美大島出身の里アンナさんが透き通る歌声でギターの音色と共に2曲ご披露してくださいました。里アンナさんは、カナダのサーカス集団シルクドゥソレイユの公認ボーカリストでもある。独特の歌唱法で会場の雰囲気

気を和やかにプロデュースしてくださいました。

親の顔 森末慎二

演目は、立川志の輔の新作落語。森末さんは、プロの落語家としても活躍されているだけに見事な一席であった。ことに「体操は踊る」の討論で様々な意見が出された後だけに、問題の答えには「幅が大切なんですよ」という話しの内容は見事なマッチングであった。



（長谷川 聖修）

8) 「実技講習会 リズムと流れ」 講師：Jacki Job

南アフリカ出身の Jacki Job 氏の実技講習会に第 10 回大会最後のプログラムであったにも関わらず多く者が参加をした。

Jacki 氏のパワーあふれる号令としなやかな体から繰り広げられる流れる動きの振り付けに、必死について行く参加者の姿が多く見られた。最後は 5~6 人グループで輪を作り、バランス運動を中心としたグループ運動なども行われ、終始笑顔の絶えない実技講習会であった。(三宅 良輔)



3. 第11回大会の準備状況

次回学会大会は自由学園（西武線で池袋より 20 分）で行います。1921 年の創立間もないころよりデンマーク体操に取り組んでいる学校です。ニルスブッカー一行が来校して以来、デンマークと交流を持ちながら体操を体育教育の重要な柱として大切に続けてきています。毎年 10 月には全校生徒（4 歳～22 歳）が大芝生に集い全員参加で演技発表会を行います。大会ではこの「体操会」（10 月 8 日（土）*雨天翌日）にも皆様をお迎えし、成長段階にある児童生徒がそれぞれに応じて体操によって育まれているものを共に感じる一時になれば幸いです。懇親会は中日 9 日夜、学園の旧校舎「明日館」（重要文化財・池袋）で行います。大会日は 10 日（月）です。『人を育む体操』をメインテーマに様々な分野の皆様と体操について考え学ぶ機会になればと願っています。

それに伴い第 6 回学術研究集会を 2 月 27 日（日）に行います。デンマークからナショナルパフォーマンスチームを迎えての演技発表と講演・講習会を予定しています。詳しくは学会ホームページをご覧ください。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

(山田 恵子)